

当科におけるエプーリスの臨床統計学的検討

坂田 恵子, 島末 洋, 宮内 美和*
 東森 秀年*, 伊藤 良明*, 東川晃一郎*
 道面 仁子*, 太田 耕司, 二宮 嘉昭
 武田 恵理, 小野 重弘, 石岡 康希
 中川 裕之, 信森 剛, 重石 英生
 田部 雅樹, 小嶺満希子, 名和 明子
 水田 邦子*, 井上 伸吾, 杉山 勝*
 石川 武憲*

Clinicostatistical Analyses of Epuliden

Keiko Sakata, Hiroshi Shimasue, Miwa Miyauchi*, Hidetoshi Tohmori*, Yoshiaki Itoh*,
 Koichiro Higashikawa*, Tamiko Domen*, Kouji Ohta, Yoshiaki Ninomiya, Eri Takeda,
 Shigehiro Ono, Yasuki Ishioka, Hiroyuki Nakagawa, Takeshi Nobumori, Hideo Shigeishi,
 Masaki Tabe, Makiko Komine, Akiko Nawa, Kuniko Mizuta*, Shingo Inoue,
 Masaru Sugiyama* and Takenori Ishikawa*

(平成15年3月31日受付)

緒 言

エプーリスとは、歯肉上に発生する良性の限局性腫瘤病変の臨床的総称名として用いられ、一般的に炎症反応性および一部の腫瘍性増殖物をも示す総称名として用いられてきた。一般的に、組織学的には、線維性組織からなる病変であるが、ここには石灰化を伴うもの、伴わないものがあり、また肉芽組織からなるもの、血管増生を主徴とするものなどのあることから、各種の組織型分類が加味されている。このエプーリスというラテン語は、慣習的に歯肉上に限局して発生した腫瘤病変の臨床的名称としてあいまいながら、多用されてきた。しかし、一部には、組織学的内容を示唆する診断名としても通用し、特に線維性や線維腫性病変と同義的に用いられていると言って過言ではない。

このため、近年、欧米では病変の本質を特定して示すべく、正確な組織診断名での報告が増加している¹⁻³⁾。

病理組織学的に異なる種々の病変を、歯肉に発生した個々の独立病変として個別に扱うべきか、一括して単なるエプーリスと総称的に呼称するか、再考しなければならない問題である。今回、過去27年間に、旧来の臨床的考え方から当科でエプーリスと臨床診断した病変を再検討し、骨形成性例を含めた線維性や線維腫性、肉芽腫性、また血管腫性などのエプーリスに分類し、若干の文献的考察を加えて報告する。なお、線維腫性エプーリスと組織診断されたものは、検索初期に2例あったが、後半になるにつれその鑑別がなされなくなっているようである。一般的に組織学的に線維性のもとの厳密に区別することは、きわめて困難であり、実際的には増殖力などの臨床的経過を加味して診断を下すことが多いため、本稿では線維性と線維腫性病変を同一範疇の病変としてまとめて報告することにした。また、骨形成エプーリスについても、線維性組織の中に石灰化物の形成と混在が著明なものである⁴⁻⁶⁾。なお、線維腫性例群2例中には、石灰化例はなかった。

広島大学歯学部附属病院口腔再建外科

* 広島大学大学院医歯薬学総合研究科 顎口腔頸部医科学講座 (旧, 口腔外科学第二) (主任: 石川武憲教授)

本論文の要旨は平成14年11月の第50回日本口腔科学会中国・四国地方部会において口演発表した。

検 索 対 象

1976年から2002年までの27年間に、広島大学歯学部附属病院第二口腔外科で、エプーリスと臨床診断した224例の病変を対象として、組織診断名との関係を検索した。

結 果

1. エプーリスの組織学的診断別例数 (図1, 図2) :

エプーリス224例の組織学的診断は、線維性 (線維腫性も含む) エプーリスが135例 (60.3%) で最も多く、このうち骨形成性例は28例 (20.7%) であった。次の

で、肉芽腫性エプーリス80例 (35.7%)、血管腫性エプーリス8例 (3.6%) で、他の1例 (0.44%) は、いわゆる先天性エプーリスとしての顆粒細胞腫であった。参考までに、特殊な臨床診断名としてのエプーリス例として、義歯性線維腫15例、妊娠性エプーリス5例、先天性エプーリスの1例があった。妊娠性例の組織型の主体は、肉芽腫性が3例、また血管腫性が2例あった。先天性例の組織型は顆粒細胞腫であった。

2. 年齢・性別分布 (図3, 図4) :

年代別に発生例をみると、0歳から81歳にわたり、全体では50歳台が44例で最も多く、次いで40歳台と60

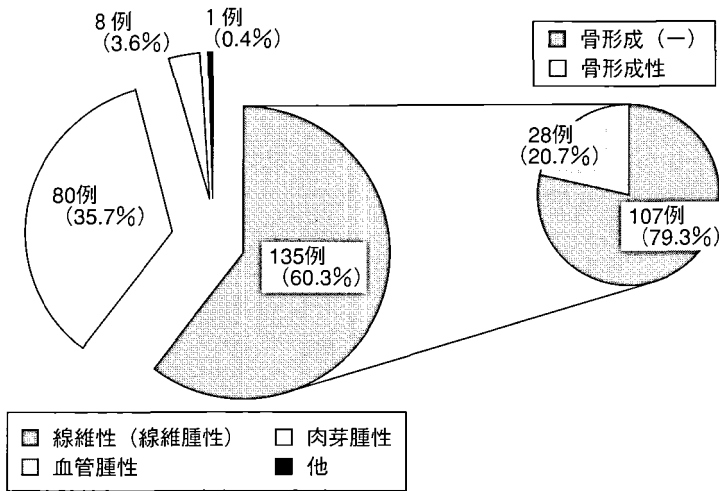


図1 エプーリスの組織型別例数 (224例)

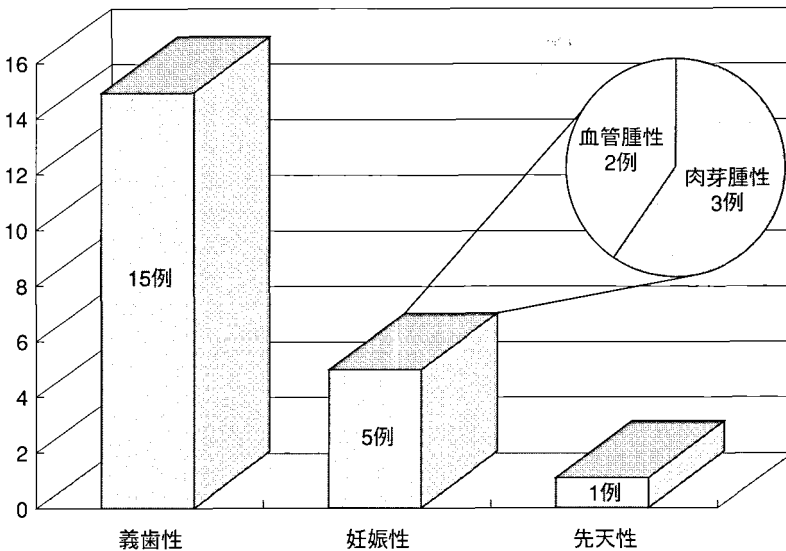


図2 臨床的特殊エプーリス例 (21例)

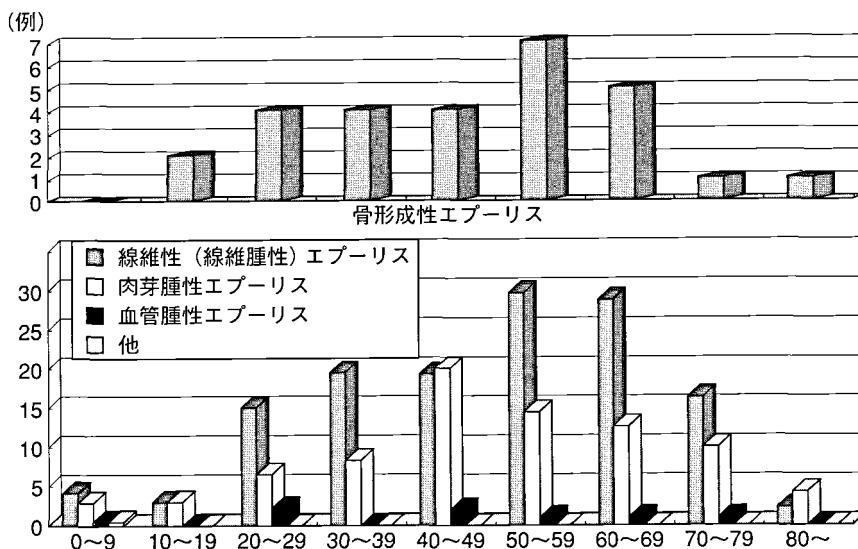


図3 エプーリスの組織型の年齢別発現頻度 (224例)

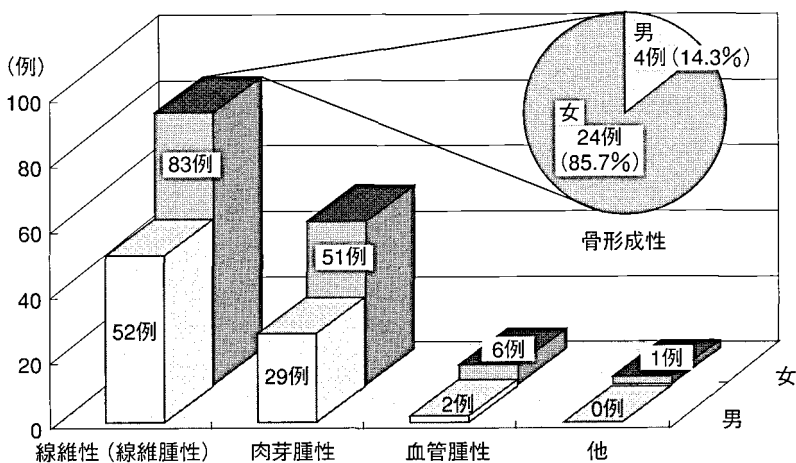


図4 エプーリスの組織型と性別発現頻度 (224例)

歳台が各41例であった。組織型別にみると、線維性に一括した例は20歳台から70歳台にわたり広範にみられ、中でも50歳台と60歳台が最も多く、それぞれ29例と28例であり、合計は57例で4割以上を占めていた。このうち、骨形成性例は50歳台に7例で最も多く、次いで60歳台5例、また、40歳台、30歳台、20歳台に各4例であり、ほぼ同数であった。肉芽腫性エプーリスは、40歳台に20例で最も多く、次いで50歳台が14例、60歳台が12例の順に多かった。血管腫性例は、8例であったが、例数も少なく、好発年齢には言及できなかった。

性別についてみると、男性83例 (37.1%)、女性141例 (62.9%) で女性に多発傾向があった。各組織型別に男女比をみると、線維性に一括したエプーリスは、

男52例、女83例、このうち骨形成性エプーリスは男4例、女24例であった。肉芽腫性エプーリスは、男29例、女51例であった。また、血管腫性エプーリスは男2例、女6例で、どの組織型別分類でも女性に多発していた。特に、骨形成性例では女性例が、男性の約6倍多く発生していた。

3. 発現部位別頻度 (図5):

この頻度は、上顎前歯部に多いとの報告がみられる^{4,5,7,9,10,12-14)}。自験例では、上顎前歯部62例 (27.7%)、上顎白歯部59例 (26.3%) で、一方、下顎前歯部が45例 (20.1%) で、下顎白歯部が61例 (27.2%) であり、著明な差異はなかった。

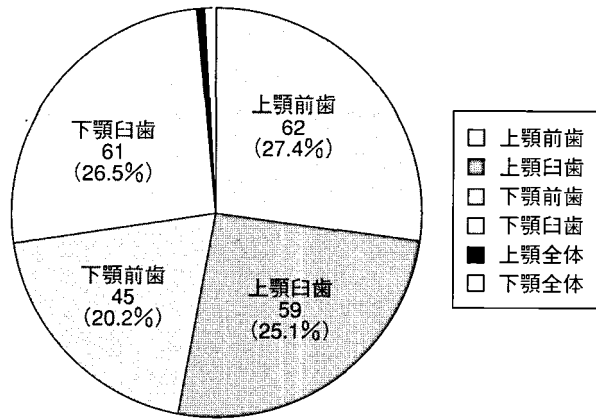


図5 エプーリスの発現部位別頻度 (224例)

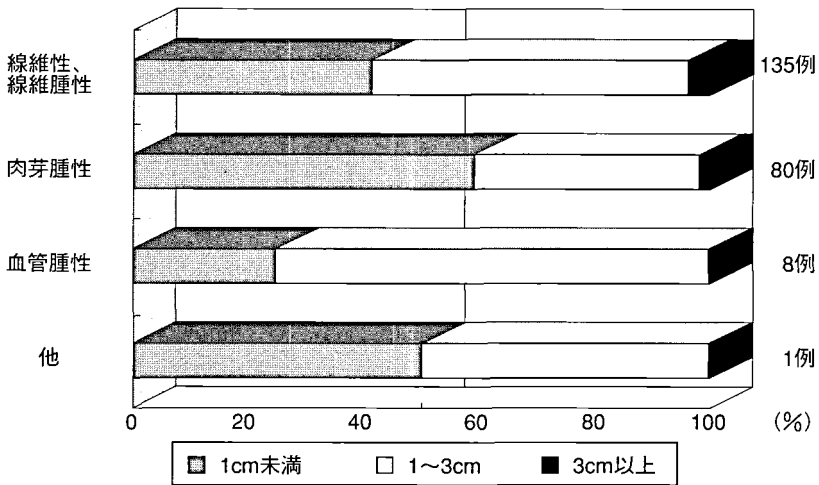


図6 エプーリスの組織型と大きさ別発現頻度 (224例)

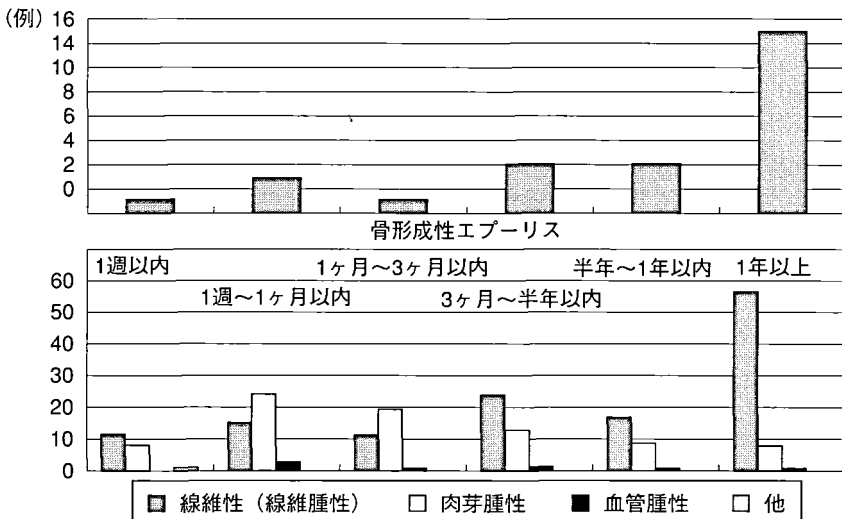


図7 エプーリスの組織型と病悩期間 (224例)

4. 組織型と腫瘤の大きさ別発現頻度 (図6):

線維性に一括したエプーリスの135例中、1 cm 径大未満のものが56例 (41.5%)、1~3 cm 径大が74例 (54.8%)、および3 cm 径大以上が5例 (3.7%)であった。肉芽腫性例で、同様に大きさ別にみると、80例中、各49例 (61.3%)、32例 (40.0%)、および1例 (1.3%)であり、血管腫性例で同様にみると、各2例 (25.0%)、6例 (75.0%)、および0例であった。

5. 組織型と来院までの病脳期間別発現頻度 (図7):

線維性として一括したエプーリスは、1年以上経過した例が57例 (25.4%)で最も多く、次いで半年以内の24例 (10.7%)で、他には大きな差はみられなかった。肉芽腫性エプーリスの病脳期間は、1週~1ヶ月以内のものが24例 (10.7%)で最も多く、次いで3ヶ月以内が19例 (8.5%)、および半年以内が13例 (5.8%)であった。血管腫性エプーリスの8例では、1週~1ヶ月以内から1年以上の期間別分類においては、大差はなかった。

考 察

今回、検索した224例のエプーリス症例を病理組織型と性別、発生年齢、大きさ、発生部位、および来院までの病脳期間などの点から検討した。組織学的診断名は、線維性に一括したエプーリスが135例 (60.3%)で最も多く、このうち骨形成性例は28例 (20.7%)で、次いで肉芽腫性エプーリス80例 (35.7%)、血管腫性エプーリス8例 (3.6%)、他の1例 (0.44%)は、いわゆる先天性エプーリスの顆粒細胞腫であった。巨細胞性エプーリスはなかった。線維性に一括したエプーリス、および肉芽腫性エプーリスを合計すると96%の大多数を占めていた。これらの組織学的エプーリスの発生頻度が高い点では、本邦の多くの報告でも共通していた⁴⁻¹⁴⁾。臨床的に特殊なエプーリスには、義歯性線維腫15例、妊娠性エプーリス5例、先天性エプーリスの1例があったが、妊娠性の組織型のうちでは肉芽腫性が3例、血管腫性が2例であり、また、先天性の組織型は顆粒細胞腫に属するものであった。妊娠性エプーリスは、妊娠前半期のもものでは血管増殖の著明な肉芽腫像を示し、妊娠後半期のもものでは血管腫性のもものが多く、分娩後に切除されたものは線維性であったとの報告もあり⁷⁾、肉芽組織の増殖に始まり血管の増殖拡張を頂点とし癒痕化にいたる一連の推移を示すものと考えられている^{4,6)}。これらには妊娠による卵胞ホルモン、黄体ホルモンの変化が関係しているといわれている⁵⁾。しかし、今回の報告は5例と、例数も少なく、血管腫性のもものは2例ともに妊娠5ヶ月、肉芽腫性の

ものはすべて出産後2ヶ月以内のものであり、諸家の報告と一致しない結果であり、明瞭な判断はできなかった。

年代別発生では、石川⁴⁾、吉木⁶⁾は20~30歳台に、また杉村ら⁵⁾は40歳台に多く発生したと報告しており、青壮年に多い傾向がみられている。一方、我々の検索では40~60歳台に多く発生しており、彼らの報告よりやや高い年齢層に多くみられた。

男女比についてみると、石川⁴⁾は1:1.8、また杉村ら⁵⁾は約1:2、Grüner⁸⁾は1:2.2、福田ら⁹⁾は約1:2.3、張ら¹⁰⁾は1:2.2、加藤ら¹¹⁾は1:1.7、また岡上ら¹²⁾は1:1.5であったと報告している。我々の報告でも1:1.7で女性に多発傾向がみられた。各組織型別に男女比をみると、線維性に一括したエプーリスは1:1.6、このうち骨形成性エプーリスは1:6.0であり、肉芽腫性エプーリスは1:1.8であった。また血管腫性エプーリスは1:3.0で、どの組織型別分類でも女性に多発していた。特に、骨形成性例は、女性例が、男性の約6倍も多くみられ、岡上ら¹²⁾の1.7倍、川崎ら¹³⁾の1.6倍に比べて、高い発生率を示した。

発生部位では、上顎:下顎の発生比をみると好士⁷⁾は1.25:1、石川⁴⁾は1.32:1、張¹⁰⁾は1.60:1、岩崎¹⁴⁾は1.86:1と記載し、上顎に多発していることを示しているが、我々の報告では1.1:1であり大きな差はみられなかった。

腫瘤の大きさ別分類では、3 cm 径大までのものが224例中219例と症例の97.8%を占めていた。組織型別には、線維性に一括したエプーリスは、肉芽腫性例に比較して、大きな腫瘤を形成する傾向が高いことを示していた。一方、血管腫性エプーリスでは、1 cm 前後の例が多く、最も大きなものでも1.7 cm 径大であった。岩崎ら¹⁴⁾の報告では、小豆大から大豆大のものが最も多いとされ、石川⁴⁾、吉木⁶⁾は雀卵大までのものが多かったと報告している。

来院までの病脳期間は、好士⁷⁾、張ら¹⁰⁾によると、発症に気づいてから来院までに1年以内が多かったことを述べている。今回の検索でも全体では1年以内に来院する症例は158例で70.5%を占めていた。組織別では、肉芽腫性エプーリスは、1週~1ヶ月以内のものが最も多く、線維性に一括したエプーリス、特に骨形成性エプーリスにおいては他の組織型より病脳期間が長い例が多くみられた。血管腫性エプーリスでは例数の点から、病脳期間に関する差には言及できなかった。

組織の大きさと病脳期間の関係は、肉芽腫性では、経過の長い例ほど大きな腫瘤が多くなっていた。

線維性に一括したエプーリスでも病脳期間の長い例ほど大きい例が多く、特に骨形成性例ではその傾向が

強く見られた。病巣期間の短い例は、症例が少なく、明瞭な判断はできなかった

結 語

過去約27年間に当科でエプーリスと臨床診断した224例を組織学的に、また年齢・性差・発現部位・大きさ・病巣期間別に発生病態を検討し、若干の文献的考察を加えて報告した。

参 考 文 献

- 1) Bhaskar, S.N.: Synopsis of Oral Pathology, Mosby Co., St. Louis, p 485-499, 1981.
- 2) Pindborg, J.J.: Atlas of diseases of the oral mucosa. Munksgaard, North and South America, p166-167, 1973.
- 3) L.R. Eversole & S. Rovin.: Reactive lesions of the gingiva. *J. Oral Pathol. Med.*, 1, 30-38, 1972.
- 4) 石川梧郎：口腔病理Ⅱ（監修：石川梧郎）：改訂版，永末書店，京都，p. 229-240, 1982
- 5) 杉村正仁，堀内克啓：口腔外科学（監修：宮崎正，編集：松矢篤三，白砂兼光）。2版，医歯薬出版，東京，279-281, 2000
- 6) 吉木周作：口腔病理学（鈴木鍾美）。2版，医歯薬出版，東京，83-88, 1997
- 7) 好士和夫：エプーリス（歯肉腫）の臨床的ならびに組織学的研究。口病誌 26, 1666-1682, 1959.
- 8) Grüner, E.: Die Epulis und ihre Therapie. *Dtsch. Msch. Zahnkk.* 33, 63 1915
- 9) 福田容子，戸塚盛雄，武田泰典，鈴木鎮美：エプーリスの病理学的検討—第1報—症例の概要—。岩医大歯誌 10, 136-141, 1985.
- 10) 張丕明：本学における最近の6年間のエプーリス患者の臨床統計的観察。歯学 58, 2, 1970.
- 11) 加藤隆三，川尻秀一，西出雅博，山本悦秀：当科におけるエプーリスの臨床病理学的観察。口科誌 40(2), 423-431, 1991.
- 12) 岡上真裕，小宮山一雄，長谷川光晴，藤田 裕，加藤雅子，花井健一，神津光昭，吉村 誠，関根光治，工藤逸朗，茂呂 周：エプーリスの発生機序に関する研究1。エプーリスの臨床病理学的検討。日大歯学 71, 99-107, 1997
- 13) 川崎五郎，空閑祥浩，近藤裕子，徳久道生，水野明夫，岡邊治男：エプーリスの臨床統計的観察およびいわゆる骨形成性エプーリスについて。口科誌 45(1), 80-85, 1996.
- 14) 岩崎弘治，梶川幸良，大西 真：エプーリス63症例の臨床的観察。日口外誌 22, 332-337, 1976.